

8.道場について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9711

8. 道場について

浜 島 悠 樹

1. はじめに
2. 道場の概要
3. 栢野、我谷の道場
4. 道場の仕事
5. おわりに

1. はじめに

調査地である山中町の西谷地区は大変、仏教、とりわけ浄土真宗の信仰の篤い地域である。調査を進めていく家々には必ずと言っていいほど、立派な仏壇が飾ってあり、話を聞いていく段階においても仏事に関する事柄が生活と密接していることがうかがえた。そして、そういった話を聞いていくにつれて、「道場」という、私たちの土地では聞かない、仏事に関わる家が存在するということを知った。その聞きなれない単語の存在に、私は純粋に興味を湧き、それについて調べてみようと思い立った。本章では、西谷地区で代々受け継がれ、仏事において大きな役割を果たしてきた道場、特に、栢野、我谷の道場について取り上げる。まず、道場の概要、歴史について述べ、栢野、我谷の道場の所在、そして、道場の仕事に関して詳述する。

2. 道場の歴史

2.1 道場とは？

道場の歴史を述べる前にまず道場とは何かというと、道場とは簡単に言ってしまうと浄土真宗門徒をまとめるため遠くにある浄土真宗の寺に代わってまとめる家のことを言う。なぜ、このような組織が作られたかという、通常、門徒がいるところの近くにその寺院があるのだが、藩政時代に寺院を新しく建立することを禁じたため、寺院の出張所、出先機関として、仏事に明るい者に、寺院の僧侶の世話、あるいは、僧侶に類する行為をなさしめたのが道場の由来だという。そして、その管理者は寺院と異なって、俗人であり、道場役、道場様、道場坊主などと呼ばれる。

また、通常、仏壇には仏像など置かれられないのだが、道場の仏壇には仏像が置かれている。

2.2 道場の歴史

かつて、山中一帯は天台宗を信仰しており、天台宗の道場のことを「ジョウジャ」と呼んだ。ジョウジャは下谷、栢野などにジョウジャ堂（後の蓮如堂）を建てていた。徳性寺などもかつては天台宗であった。そして、蓮如が浄土真宗を広め、浄土真宗の道場（現在の道場）ができ始め、村によってはジョウジャと道場が別々に存在していた。道場は基本世襲制ではあるが、近代以前も含む、長い眼で見れば我谷の道場は頻繁に代わっている。

3. 栢野・我谷の道場

<栢野>一東派の道場が三軒ある。

大聖寺の願成寺（小谷碩彌さん）—6軒……8軒あったがお年寄りが亡くなり、減った。

小松の勝光寺（畦地信一さん）—13軒……70～80歳の信仰の篤い人が多い。

小松の本覚寺（堂前幹夫さん）—11軒

<我谷>西派の道場が一軒ある。

専称寺（平田良耕さん）

4. 道場の仕事

4.1 栢野

栢野における道場の仕事は、基本的には、町内に寺がないので、お寺の代わりに務め、法話などをすることである。お正月には門徒が皆、道場に集まりお勤めを行う。そのお勤めは、昔は午前6時から、今は午前8時から始まり、まず正信偈、和讃、回向などの諷経（フギン）おこない、次に食事会をし、お酒などもそこでは飲まれる。そして、年賀の挨拶をして午前10時には終わる。その、正月のお勤めの際、お賽銭を配り、そのお返しに南京豆や銀杏の炒ったものを頂く。そして他には、月お講といわれる、昔は月に2度だったが今は、月に一度、門徒の各家を周り正信偈や阿弥陀経などの練習を行う親睦会のようなものがある。これは、毎月27日の親鸞聖人の命日に行うのだが、最近では持ち回りの家の都合によって日にちが変更される。しかし、そのお講は今では畦地さん以外、ずっと続いてはいない。他に、4月23日から5月2日にかけての蓮如忌、8月24日の地藏盆においても道場は重要な役割を果たしている。また、トトお講、カカお講なども昔は道場で行っていたらしいが、今ではやっていない。また、1月16日に満座講（ご満座）を行

う。これは、親鸞聖人の命日の前日つまり、通夜に当たる日に夜伽を行い、檀家ごとに道場に集まり、僧侶を呼び、経を上げるなどするものである。その後、食事会を行う。総会のようなものであり、現在では新年会のようなものになっている。

栢野に道場は3軒あるのだが、それぞれが違う日に各お講を行うので、栢野の人々、全員がすべてのお講に行く。また、畦地家が一番大きな道場であり、門徒数13軒から14軒ほどであるのに対し、他のところは9軒から10軒ほどである。

他に、主な仕事としては誰かが亡くなったときに、亡くなった1~2時間後に仮通夜を行うのだが、その際、僧侶がこられない場合に道場役が枕経を唱える。しかし、仮通夜自体、最近は行われなくなっている。

他には、門徒の命日に門徒がお米と蝋燭を朝早く持ってきて、蝋燭を上げ、お勤めをして帰る。そして、門徒は帰るのだが、その際、お米を頂く。これを道場参りと呼ぶ。道場参りは三回忌まで、年一回行い、その後、各家で行われる。

道場役は、法事、正月の報恩講のお参りの際、栢野会館横の釣鐘をたたく。

また、道場役は通夜や葬式の際、僧侶の手伝いや接待を行い、役僧様と呼ばれる寺院から住職が連れてくる経を読むなどの手伝いのための僧侶の世話も行う。葬式の後、僧侶が帰られてから、道場役が経を唱えるなども昔はしていた。

道場は、僧侶の資格なしに名乗ることができるのだが、栢野の小谷さんは僧侶の資格を取得した。そのため、僧侶の格好である黒袈裟を纏って葬式にいける。小谷さんは14代目であり、完全世襲制である。また、自分の道場を寺院にすることができるようなのだが、300から400の檀家がいないと生活ができないそうなのでしていないということである。

4.2 我谷

現在、我谷には異なる寺の門徒がいるにも関わらず、道場が1人しかいない。それは、人が少なくなってきたことや、小さなところで道場さんが何人もいてもまとまらないということで加賀江沼の寺の中で有力な勝光寺の道場であった人（今で言えば平田さん）が1人で取り仕切ることになったからである。

道場として、平田さんは3代目であり、2代目までは平田太左衛門という名を継いでいた。2代目である平田さんの親の代までは道場としての役割も活発に行っていたが、今では少なくなってしまっている。また、我谷では檀家として浄土真宗の寺院が勝光寺に10軒、大聖寺の専称寺に3軒と、分かれてしまっているが、道場として、平田さんはどちらの寺院にも従事している。2代目のころは、小さい子供が死んだ場合には、寺院の僧侶を呼ぶこともなく、道場役が経を読み、葬式を執り行っていた。そして、火葬場から持ち帰ってきた遺骨に、道場役は経を上げていた。現

在の道場の仕事としては墓への納骨時や、年忌の際に経を上げに行くことなどである。また、四十九日の期間、道場は7回、経を読み上げていた。その家では四十九日の期間はちゃんと精進をし、それらが終わると精進上げをおこなっていた。

平田さんの息子は現在、神戸におり、道場の後継者がおらず、今後については我谷の人々と相談をして、決めていくということである。

4～5年前までは1月の1～3日は我谷の人々が集まってきて、道場と一緒に朝、晩、お参りとして、3日間、経を読むなどしていた。他にも、1月15日の親鸞聖人の命日には弔いのお参りとして正信偈を読み上げていた。お参りの後は宴を行い、また、お参りを行っていた。

報恩講の際、昔は、我谷は人が多かったため、寺院の僧侶は1日では家々を回りきれず、道場の家に泊まり、2日かかりで家々を回った。また、その際、僧侶は厚遇を受け、人力車で運ばれ、豪華な食事を振舞われるなど、殿様扱いだった。また、その際、各檀家の家々は僧侶に差し上げるようにと、木炭や蕎麦など、雑穀を道場の家に持ってきて、それを、道場はトラックで寺まで運んでいた。それに対するお返しにと、寺院からは「お年頭」として足袋一足ずつが配られた。また、現在では、報恩講で僧侶に上げるものはお金であり、それに対する寺院からのお返しはない。

道場の平田さん宅には寺院へ納めたお金の記録「萬年帳」（明治45～）や、法名を記録した「過去帳」（大正3～）、墓の記録の「過去帳」といった資料がある。

初盆の際には、特に変わったことはせず、墓で道場が経を上げることぐらいであり、しかも、今となってはそういったことを頼みに来る人も数えるほどしかない。

4.3 葬儀に関して

道場は葬儀に関しても深く関わっているのので、ここに栢野の葬儀を例に葬儀の手順と道場の仕事を詳述する。

誰かが亡くなったらまず、医者を呼び、看取ってもらう。その後、故人の枕元に台を置き、茶碗に盛られたご飯に箸を突き刺した、お仏供米を供える。そして、道場役が呼ばれ、枕経として、阿弥陀経が唱えられる。これら一連のことが、仮通夜と呼ばれる。それから、「おかみそり」が行われる。実際には髪は剃らず、刃を当てるだけである。そして、道場役は法名を取りに行く。法名は亡くなる前にも取りに行ける。東派の場合は京都の西本願寺まで出向く。また、道場役は黒袈裟を着るのだが、一週間の本願寺での講習や、勝光寺での練習、勉強の後に着ることが許されるものである。

仮通夜は、午後10時などに亡くなられた場合は、その日に仮通夜を行い、枕経だけを行う、そのとき、親族はただ集まるだけである。午後7時の場合は次の日に通夜を行い、深夜、早朝など

になると次の日に仮通夜を行い、その翌日に通夜を行う。仮通夜は、葬式の段取りを決める場であり、枕経を上げたら道場役は帰る。次の日の通夜のために決めるものとしては、次のような役職がある。

葬儀委員長—喪主ではない40歳以上の近い親戚、従兄弟、そして、帳場に詳しく、すべてを経験し、仕切れる人が行う。

僧侶係—お年寄りが行う。僧侶の接待係。

まかない—遠い親戚の女性のみ

茶坊主—今は存在せず、お参りに来た客に茶を出す係。若い人が行う。

受付—30歳前の青年団などの少し年の上の人が行う。

また、家族は一切、葬式に手も口も出さない。各役職は通夜の朝には決まっており、道場には、3軒すべてに手伝いを頼みに行く。道場は栢野で亡くなった人なら誰でも3軒とも経を上げに行く。

通夜では、朝、6時ごろに皆集まり、弔問する。そして、まず、お手伝いのもの全員で障子張りなどの清掃を行い、まかないの人は昼、晩の精進料理の用意をする。通夜の前に寺院から祭壇を3万円ほどで借りてきて、組み立ての経験者とともに仏間の横に組み立てる。そして、亡くなった人の湯灌を行い、帷子をみんなで縫う。その際、はさみは使わず、布を裂き、糸は結ばない。いまでは葬儀屋が用意をする。手甲、脚絆、向足袋、三角布を着せ、白のずた袋に5円玉を入れて首に提げさせる。それから棺を祭壇の前に設置し、4時ごろに食事を取る。棺も寝棺から座棺に、木からダンボールにと変遷を遂げている。

6時から通夜は始まり、参列者が訪れる。道場役の三人で経を上げる。まず三人で阿弥陀経を読み、後に参列者全員で正信偈を行う。9時ごろまで行われ、正信偈が終わったら親戚、手伝い、道場役は簡単な夜食を取る。この夜食には酔の物は使わない。昔は僧侶を通夜に呼ばなかったのだが、ここ10年くらいから僧侶を呼ぶようになった。

また、通夜の際、受付は4名ほどおり、香典を受け付け、お返しを渡す。香典をもらったらすぐに中を確認し、香典袋に番号、裏に金額を記入し、20番までいったら帳場に渡しに行く。その数が多かったら記録をつけるのだが、少ない場合はつけない。帳場では確認せず、記録をつけるのみ。町内会から来た香典は寄付の形で返す。香典へのお返しとしては、昔は砂糖やお茶などの見栄えのする重いものだったが、今では、ビール券などの荷物にならないものになっている。夜食では酒が振舞われ近い親族のみで宴が行われる。昔は昼からお酒が出ていたが、今は車で参列者が多いため出されることはなくなった。通夜の夜に、寝ずに焼香順を決める。

次の日、葬式は朝9時ごろから準備が始められ、寺院への連絡は仮通夜で決められたときに道場が連絡をする。昼ごろに僧侶が到着し、帳場の人間はおときの数や、ご馳走の計算、人数の把

握などを行う。道場役は法名を取りに行ったり、骨壺を貰ったり、葬儀の際に祭壇に立てる枝を貰いに行く。また、達筆な人に板に法名を書いてもらう。僧侶は大抵、迎えに行かず、自ら来る。家によって、どこの寺院を呼ぶか帳場と家族が決めて呼び、10人以上呼ぶ場合もある。

昼ごはんを食べてから、始まりの合図として道場役が栞野役場横の半鐘を7回叩き、村のお年寄りが、5回打ち上げるように叩き、次に1時か2時に2つ打ち上げるように叩き、最後にカンと1つ鳴らす。そして、「ご縁様」(お手次寺の住職)と「役僧様」が出て来る。

祭壇の前にゴザが敷かれ、その前にご縁様が座り、ゴザの周りに他の寺院の住職が並ぶ。ご縁様の後ろに役僧様が並び、さらにその後ろに道場の三人が座り、その後ろが参列者という形になる。ご縁様と道場役が祭壇横の仏壇に行き、観衆偈をあげる。元の場所の戻り、ご縁様だけ焼香をする。それから、役僧様がリンを叩き、南無阿弥陀仏を唱え、リンを叩き、それを合図に他の寺院の人が出てくる。そこから正信偈をあげ、ご縁様はその途中に立ったまま焼香をし、その後座る。全体の焼香が済むまで南無阿弥陀仏が唱えられる。

終わった後、役僧様と道場役三人と参列者が残り、経を上げる。そして、道場たちも退場する。その後、身内が棺を出し、別れの儀式をし、霊柩車で運んでいく。近い親戚がついていき、役僧様も野辺送り(焼く前にあげる阿弥陀経)のためについていく。役僧様がいなときは道場役が阿弥陀経をあげた。骨拾いをして、お墓にお参りし、家に戻ってきたら食事を取る。そこまでの帳場での計算に入る。その後の片付けは全て身内が行い、手伝いの人は行わない。翌日に、身内は納骨を行う。

その後、7日目までは毎日、四十九日までは7日ごとに道場がその家へお参りをしに行く。四十九日には忌上げとして、豪華な生臭物が入った料理を食べる。

これらのことから、葬儀には道場が深く関わっており、葬儀のやり方については道場主体ともいえるのではないだろうか。しかし、今では、葬儀での道場の仕事もほとんどなくなってしまっているようである。

5. おわりに

「道場」とは親から子へという世襲で一定の家がその役を担い、寺と人々をつなぐ存在であり、宗教と人、ひいては、人と人をつなぐ架け橋としてその役割を永らく担ってきた存在である。しかし、時代とともに、現代へと移り変わる過程において、その役目は変化してきている。この調査実習において、私が一番感じたことは、変わろうとしていく、町や、人々、文化の存在である。ひとつの風習が変わり、また別の文化が生まれようとしている。まさに、その瞬間を切り取ることができたような調査実習であった。

人々が変わらないもの、信じてきたものの最も古く、根源的なものの1つである「道場」という存在が現代において、如何に変容し、その求められるところが少なくなっている現状について私は、部外者ながらも驚きを隠せなかった。しかし、より驚かされたのが、その変わっていくものに対し、微塵も怒りや、悲しみをぶつける人がいなかったことである。変化する西谷に対し、皆、一様に笑顔なのである。時折、さびしそうな表情を見せるときもあるが、ほとんどの人が、明るく、その変化を受け入れているように思われた。そして、何より、自分たちの土地を愛しているようにも見えた。

西谷の人々は皆、私の拙い聞き取り調査にもいやな顔ひとつせず、本当に嬉しそうに自分たちの土地について語ってくれた。そこから、私は、本当に西谷の人たちはこの土地が好きなのだという感銘を受けた。そして、私は、西谷の人たちから、その土地を愛し、生活していくことについて教わった。自らの土地を愛せなければ、その土地を変えることも、よりよくしていくことも無理なのだということを教わった。西谷の人々の笑顔からは郷土愛の精神が溢れていたのである。

そのような西谷の人々の話から窺えるように、「道場」は西谷の人々に尊敬され、手厚く扱われ、心の拠り所と呼べるような存在である。そんな「道場」の役割が、段々と、現代生活において、代替物に変わろうとしているこの状況は、私には、幸せなのかどうかは判断しかねるが、西谷の人々は少しも不幸だと思っていないことは確かである。それは、代々、「道場」が受け継いできた、人と人をつなぐという精神を失っていないからではなかろうか。元々、門徒をまとめるために生まれたという「道場」の性質から、「道場」の本質は、その、宗教的役割もさることながら、なにより、地域の人々を1つにするということに、通じているのではないかと私は思うのである。その点においての「道場」の役割は全く衰えてないのではなかろうか。西谷の人々は今もなお「道場」を尊重し、「道場」も、地域の人々を大事にしている、この関係が、すぐに変化してしまうとは考えにくい。しかし、時代は確実に変化していつているのである。「道場」という地域に密着した存在もいつかはなくなってしまうのかもしれない。そう考えると実にさびしいものである。しかし、西谷の人々の笑顔を思うと、その変化も、きっと悪いことではないように思われる。そして、そのときには「道場」の代わりとなるような人と人をつなぐようなものができていることだろう。

そして、この報告書を書くにあたり、調査に協力してくれた皆様に心よりお礼を言わせていただきたい。お忙しい中、調査に応じてくれた西谷の皆様、本当にありがとうございました。この報告書が協力して下さった皆様に少しでも報いることができればと願っております。